

場が必要だと感じます。

グループディスカッションに関してですが、我々の課題は「自殺率とその地域格差」ということでした。しかし地域格差というものを立体的に捉えるために必要な社会経済面、医療経済面の予備知識、また土地土地の気候、風土に関する理解が不足し、途中途中根拠に乏しい議論を進行させてしまう面がありました。メンバーの多くが初対面ということや、時間的にも情報量としても限られている状況であったことを考えると、グループとしての全体的な機能は非常に高かったように思います。

テクニカル・ビジットや懇親会など、まだまだ書きたいことがたくさんあるのですが、長々となってしまうので割愛させていただきます。21世紀は益々社会医学、予防医学の重要性が高まる時代であり、医療分野に進む学生にとって益々重要性を持つ貴セミナーに来年度も是非参加したいとおもいます。最後に、今セミナーにおいて、準備を含めて始めから終わりまで大変お世話になりました、本橋先生、金子先生をはじめとするセミナー事務局の皆様、また貴重なご講演やお話をいただきました諸先生方に厚く御礼を申し上げて感想レポートとさせていただきます。

関根 綾希子 東京大学大学院医学系研究科地域看護学分野 修士1年

1.参加目的

私は高齢者への保健活動にとっても関心があり、今後の研究課題としてその問題について考えていきたいと思っている。だが、なかなか問題を明確化できず、今回のセミナーを通して研究課題に対するヒントが得ることができればと思い、参加を希望した。

2.学んだこと

①これからの高齢者への保健活動としてアクティブレベルを高める対策を考えていくことの大切さ

これからの保健医療の課題として、健康寿命をいかにのばすか、介護期間をいかに短くするかが挙げられた。これまでの延命医学からの変革である。健康寿命の延伸のためには、アクティブレベルをいかに高めるかが重要になってくると言う。アクティブレベルにはその人の性格や活動状況などが影響していると考えられているが、その要因を明確にし、具体的対策(アプローチ方法)を検討していく必要性を学んだ。

②健康問題に対してチームアプローチをしていく大切さ

これまで他職種(看護職以外)の人たち時間をかけて話し合う機会があまりなかった。医学生の中に混ぜていただき、ひとつの事象について様々な視点で考え、アプローチしていく必要性を改めて感じた。やはり、そのときにはそれぞれの専門性を生かし、役割分担し、互いに尊重し合い活動することが重要であると再度確信した。

③人間関係の輪を広め、広い視野で物事を考えること

今回のセミナーでは、魅力的な講義以上に夜の酒盛りが学びを深める重要な時間であった

と思う。相手の話を聞いているだけでなく、自分の意見や考えを話し、他者とディスカッションできたことは一番の学びとなった。それは社会医学に関するだけでなく、人生のこと、社会の現状など広い範囲に及んだが、その時間を通して新たな考え方の視点をしることができ、視野を広げることができたように思う。また、学生だけでなく、先生方もディスカッションできたことがさらなる視野の広がり、知識の深めにつながった。

3. 反省と今後の課題

① 向学心を持ち、積極的な姿勢で学びを深めること

講義など集団であると質問したいと思ったこともなかなか勇気がなく、質問の機会を逃してしまうことがしばしばあった。集団の中になると、どうしても消極的になってしまう自分を改善する必要があると思いながら、なかなか改善できないでいる。さらに、社会医学の分野で最先端の研究をなさっている先生方の貴重な講義を受講する機会にも恵まれたにも関わらず、その機会を十分に活用できなかった。より向学心を持ち、講義に挑み、学びを深めていく積極的な姿勢を持つよう努力していきたいと思う。

今回の学び・反省を、今後の研究や実践活動に役立てていきたい。まずは、今回の学びを生かし、修士論文に取り組んでいきたいと思う。

4. 最後に

医学生でない私をもセミナーに参加させていただきまして、本当にありがとうございました。充実した3日間となりました。

主催していただきました先生方、講義をしていただきました先生方、関係者皆さまに感謝申し上げます。ありがとうございました。

高濱 隆幸 香川大学医学部医学科 4年

確か5月だったと思いますが、公衆衛生学の講義の後、「秋田でおもしろそうなセミナーがあるよ」と教えてもらいました。大学の中では社会医学に興味を持っている者が少ないため、全国に散らばっている関心の似た学生と出会うことに大変興味を持って参加することにしました。

出発前、今回秋田では「名刺を40枚配りきることにしよう」と決めていました。というのは、将来にわたって情報交換できる先輩・友人を作りたいと思ったからです。結果、参加者や先生方にも顔を覚えていただくことができたと思っています。

今後ともぜひ様々な場所・機会に教を乞いたいと思っておりますので、ぜひともよろしくお願ひします。皆が参加するメーリングリストを通じて、情報交換が活発にされることを期待しています。

さて、大学で臨床の講義も半ばを過ぎ、将来の進路を少なからず意識しだす時期にこのようなセミナーに参加できたことは大変意義深いものがありました。それは先にも書いたように、似たような夢を持った学生との交流が持てたというだけでありません。

大学に入って最もインパクトのある「臨床は社会医学の基礎である」という言葉を、大阪市立大学圓藤先生から頂くことができたからです。この言葉を学生の部屋で、先生と少しばかりのお酒を飲んだ場面で聞いたことも貴重な体験でした。

この一言は、働き始めてから社会医学と臨床医学の両立、はたまた、どちらか一方にするか迷いをもっていた僕にとってみれば斬新な見方でした。学校保健、医療教育学、行政の仕事に興味を持っています、人生設計を考えたときに将来のある時期で研究を始めよう、と決めることは難しいことでした。けれども、臨床をすることは決して回り道ではなく、社会医学を考えるための基礎になっているのだ、と考えられるようになりました。

今回のセミナーでは、分子疫学と社会医学というテーマで講演なされた高知大学の中村先生のお話を伺えたことによって、この学問の奥の深さ、懐の深さに再び感心しました。自分がやりたい、調べたいと思っていることが社会から必要とされているかどうか見極めるためにも臨床体験であるとか、経済学の知識を持つことが大事であることを教わった気がしました。

最後になりますが、社会医学に携わる先生方、厚生労働省の医系技官の方の生の声を直接伺うことができた今回のセミナーは、私の今後の進路設計の中でも大きなウェイトを占めることになるだろうと思っています。本当にこのような機会を私に与えてくださったことに感謝しています。本当に皆様、ありがとうございました。

辻 敦美 東京医科歯科大学医学部 6年

秋田から東京へ戻る新幹線の中でも、熱が冷めず、セミナーでの出来事を反芻していた。刺激の多い2泊3日だった。

セミナーでは、大きく3つの収穫があった。

一つは、社会医学に興味を持つ学生同士で意見交換をできたこと。普段新聞など社会医学的な問題を知る機会が多いが、それを誰かと共有する機会は乏しく、今回のセミナーでそのような時間を得られて大変勉強になった。

二つ目は、社会医学の広がりを感じられたこと。各大学の先生方が、ご専門の内容についてお話してくださったが、循環器疾患の疫学といった臨床に近い立場もあれば、アスベスト問題という社会問題に踏み込む分野もあり、社会医学の扱う分野の多さに驚いた。

そして何よりも、他学の学生・先生方・厚生労働省技官の方とお話してきたことが大きな収穫だった。これまで社会医学に対して、なかなか研究されたことが実際人々に還元されていないような物足りなさを感じていた。しかし臨床経験を生かし、実地で働く先生方の姿や思いはとても印象的であり、これまでの社会医学の認識が変化した。それは同時に自分が将来進む道の選択肢を広げてくれた。

このように充実した時間を過ごすことができ、大変満足しているが、いくつか改善点を挙げるとすれば、その土地特有の社会医学的問題を見るといった土地柄を生かした内容が

あれば、社会医学の「フィールドに出る」という側面を体験するという意味で良かったのではないと思う。臨床医学は臨床実習という現場体験がある一方で、社会医学ではそのような体験は少なく、学生が現場の面白さを実感する機会は貴重だと感じたからである。また、学生のグループ討論に、社会医学を専門とされる先生方もチームに加わってくださると、より根拠のしっかりした議論ができたのではないと思う。

大学病院での臨床実習を終え、臨床医学を学ぶと同時に、患者さんの背景にある社会的問題にもたくさん直面した。それは今回セミナーに参加した動機の一つでもあった。

そしてこの機会を通じて社会医学分野の多彩な領域を知り、「そういった問題に対しても、医療者としてアプローチできることがたくさんあるのではないだろうか」と考えていると、新幹線は東京駅に着いた。

最後に、セミナーを運営してくださった先生方、たくさんの刺激をくださった参加者の皆様に感謝申し上げます。

寺田 実奈 高知大学医学部 6年

念願の社会医学サマーセミナーに今夏ようやく参加することができました。3日間のセミナー日程中、私が参加することができたのは2日間でしたが、1週間以上秋田に滞在していたように錯覚します。大変濃密な時間を過ごし、医学部最終学年の夏にかけがえのない経験を得ることができました。

将来、健康を保つ—予防医学や保健活動に係わる臨床および研究に携わりたいと希望しながら、どのような道を歩むことができるだろうかとずっと思案しています。大学の公衆衛生・環境医学の講義にも関心を寄せてきましたが、机上で学ぶには限りがありました。このたび、社会医学サマーセミナーに参加することができて、特に貴重な機会を得たと感じた点を以下の3つにまとめました。

第1に、私が参加した2日間において、5人もの講師陣の先生方の講演を聴講することができました。大学の講義には講義目標があり、ある程度一般化されたもの、あるいは必須である知識を得ることが求められます。限られた時間で進行形の研究や取り組みを聴く機会は多くありません。こんなにもやりがいのある広い分野が存在しているということを実感することができ、感激しました。とりわけ、先生方が社会医学分野の中で日々歩まれてきた道を直接伺うことができたことは、自分自身の将来を考える上で貴重な糧となりました。

第2に、このセミナーに集う学生と出逢えて、かけがえのない輪が広がったと感じています。最終日のグループ発表および総合討論に向けて、即席で課題に取り組み、熱意溢れる学生と時間を忘れて議論しました。大学を離れて秋田という地に集まり、寝食を共にした課外活動を通して、同じ目的を共有できる仲間との一体感はとても心地よいものでした。医学生としてさらなる目標を自覚しました。

第3に、訪ねた地域を知る機会が与えられているセミナースケジュールに感嘆しました。2日目の午後に昼食を兼ねて大潟町に出掛け、干拓博物館に行くことができました。社会医学は、地域に暮らす人間の健康をみつめ、それと同時に取り巻く背景をみつめる過程のように思います。歴史、文化、産業、環境といったさまざまな因子が日常生活に影響しています。今夏セミナーを機に訪れることとなった秋田の土地の背景を少し垣間見ることができたことは大きな収穫でした。

6年次の夏、社会医学サマーセミナーに滑り込みで参加できて幸運でした。マッチング試験の日程を加味して下さり、部分参加にも係わらず、快く受け入れて下さった先生方、学生の皆様に心から感謝しています。

長沼 透 東北大学医学部医学科 3年

この夏に、第12回社会医学サマーセミナーに参加し得られた経験は、何にも代え難い貴重なものであります。3日間と短い期間ではありましたが、大学での社会医学の講義の全てを濃縮した様な、非常に濃密な時間を過ごすことができました。

3日間に渡って聴講した講義では、疫学から産業医学、行政、衛生学、国際保健に至るまで、非常に多岐にわたる分野のお話を聴け、多くのことを学ぶことができました。私は、疫学と行政に強い関心を持ちこのセミナーに参加したのですが、今までに他の分野について積極的に学ぼうとする機会をそれ程設けてこなかったため、今回様々な領域でご活躍なされている先生方のお話を聴けたことは、とても貴重な経験になりました。今回の様な短期間でこれ程まで幅広い、それも第一線でのお話を一度に聞く機会は今まではもちろんのこと、今後もそうそう経験できる様なことではないと思います。また、グループ課題では非常に限られた時間の中で、その上、初対面の面々の中で、課題に取り組む難しさがありました。最終的に班の全員が納得できて発表に至れたかはわかりませんが、それぞれが協力して一つの課題に向き合えたことは、よい体験になったと思います。

このセミナーに参加して得られたもので何よりも素晴らしいものは、多くの先生方、そして学生の皆さんに出会えたことです。様々な立場の先生方はもちろんのこと、様々な立場、考えを持って参加した学生の皆さんと交流できることが、この社会医学サマーセミナーの醍醐味だと思っています。特に連夜に渡る交流会で、（お酒を交えつつ）近い距離で話し合えたことは何にも勝る経験でした。短い期間でしたので、ほとんどお話しできる機会のなかった方々もいらっしゃったのが、心残りです。

私は、今年のセミナーは昨年の第11回に引き続きの参加になりました。今回は前回とはセミナーの進行方や、先生方、学生の構成が大きく異なり、2回目でしたが新鮮な心持ちで参加することができたのも大変幸運なことでした。また来年以降も、機会があれば参加していきたいと思っております。

最後になりましたが、貴重な経験を共有できた学生の皆さん、今回社会医学サマーセミ

ナーに参加いただいた諸先生方、代表世話人の高野先生、そして第12回世話人としてこの素晴らしい機会を提供して下さった秋田大学の本橋先生、金子先生にこの場をお借りして心より感謝申し上げます。

布田 典子 昭和大学医学部 5年

高名な先生方のセミナーを数多く受けることができ、様々な方向から社会医学を改めて考えるよい機会となりました。特に、遺伝子診断を用いたオーダーメイド予防が社会医学の中心的なテーマになりうるという、中村先生のお話はとても新鮮に感じられました。また、セミナーでは、単に研究に関してだけでなく、各々の先生がどのように社会医学と関わってこられたのかも伺うことができたことは、将来如何に社会医学と関わっていくかを考える上で、大変参考になりました。

グループ討論では、どのテーマも都市と農村の格差を考える上で大変興味深いものでした。都市部で暮らしている私にはあまり身近に感じられない話題についても、全国から参加している学生同士で議論することでより身近なものとなり、都市と農村の格差の是正について改めて考えることができました。

全国の大学の社会医学に携わる先生方や厚生労働省の先生方の懇切な御指導を、社会医学に興味のある他大学の学生とともに賜ることができた今回のサマーセミナーは、医系技官を志す私にとって、大変貴重な体験となりました。

最後となりましたが、御繁多の折、懇切な御指導を賜りまして誠に有り難く篤く御礼申し上げます。

東山 央 大阪医科大学医学部 4年

この夏休み、第12回社会医学サマーセミナーに参加した。基礎科目の中では公衆衛生学に最も興味があり、また実習で検疫所を訪れた際、行政職・医系技官という職があることを知り、興味を持っていたところ、大学で今回のサマーセミナーの掲示を見つけ、参加してみることにした。周囲に声をかけたものの誰も興味を持ってくれず、大阪から一人での参加で多少不安であったが、実際行ってみると予想以上に楽しかった。

社会医学に関する講義、グループ学習をはじめ、テクニカルビジットということで大潟村も訪れ、美味しいフレンチをいただき、干拓博物館を見学し、温泉も楽しんだ。またそれら以上に有意義だったのは、毎晩の先生・学生一緒の飲み会だったかもしれない。

‘社会医学’このキーワードで集まった学生、各地の大学の公衆衛生・社会医学系の先生方、厚生労働省の医系技官の先生方と医学・医療や将来の進路についてお話することが出来、大変有意義であった。先生方とは勿論のこと、普段、他大学の学生と将来の話などを語れるという機会はほとんどないと言ってよく、大変刺激になった。

夜の飲み会の時、地域の産婦人科医不足が話題になった。その時、ある医系技官の先生が「冷たい言い方かもしれないが」と釘を刺した上で「田舎に住むということは、それなりのリスクを背負っているのだから、お産の為に都市部に出てくるのは仕方ない」とおっしゃっていた。田舎出身の私としては少し複雑な心境であった。そして今回最も印象的だったのは、秋田大学の金子先生が「秋田で講演をすると、地元の方から『あなたは秋田に来て何年目や?』と言われることがある」とおっしゃっていたことである。'都市と農村の健康格差'この問題を考える時の難しさがここにある気がした。

'社会医学'に興味を持って集まった23人の学生と、日本の公衆衛生・社会医学、また医療行政の第一線におられる先生方と2泊3日寝食を共にする。こんな貴重な経験はまず出来ない。来年は奈良で開催されると言う。是非また参加してみたいと思う。

最後になりましたが、秋田大学を始めとし、この社会医学サマーセミナーの開催に関わっておられる先生方に深く感謝致します。

樋口 洋介 岡山大学医学部 5年

社会医学サマーセミナーで得たもの

今回私がサマーセミナーに参加しようと思った動機はもちろん社会医学への興味もありましたが、部活の先輩が2年前に複数参加していて評判が良かったというのがあります。秋田という岡山から遠い開催場所も、人生で初めての東北地方でこういう機会がなければ滅多に訪れることもないだろうというやや観光も兼ねた、目的に十分適った場所でした。講義では各大学から来られた社会医学講座の先生方による力の入った講義を受けることが出来てとても刺激になりました。社会医学とは臨床医学が持ち得ない医療制度あるいは社会そのものを変革する力を用いる唯一の学問だと考えているので、各先生方のテーマが世の中をより良い方向に変えていけることを期待しています。

八郎瀉のテクニカルビジットはそのスケールの大きさに驚きながらも、これだけの事業を成し得た当時の国の力とその後の迷走する利用について国策の運営の難しさを思い知りました。

グループ討議では少ない時間ながらも始めて会った人達とその場で一つの課題について真剣に議論するという基調かつ充実した体験をすることが出来ました。

我々のグループ課題は「地方の医師不足について」でしたが、医師の偏在と医療格差の問題について色々考えました。医師の偏在については、田舎で診療する医師にもっと手厚い人的・金銭的援助が必要であり、あるいは医師の足りない地域への医師の派遣制度を創設するべきだと考え、医療格差については道路や救急体制を整備することで医療アクセスの改善を図ればよいのではないかと考えました。

また、私はそもそも医師の数が足りないのであれば医学部の学生を増やせばよいという提案をしたのですが、サマーセミナー直後の8月31日に『厚生労働、文部科学、総務、財

務4省は、医師不足が深刻な地方の10県について、平成20年度から暫定的に大学医学部の入学定員を増やすことを正式に決めた。また、自治体からの要請に基づき緊急避難的に医師を派遣するシステムの構築など総合的な医師不足対策を盛り込んだ「新医師確保総合対策」を発表した。』というニュースが出て、非常に驚きました。医師不足の問題について国が踏み込んだ介入をするという画期的な判断ではあるものの、単純に定員を増やすだけでは結局都会から地方にやってきてまた都会に帰っていく医学生を増やすだけに繋がるのではないかと疑問が残りました。枠を増やすのであれば全て地元枠・地域枠でなければ意味が無く、その様な対策を各大学医学部が取らなければならないと考えます。

医療費の増加を抑えるために医師の総数を抑えてきた一方で、臨床研修制度の導入による医師の都会への流出を読めず、深刻な地方の医師不足を招いた国の責任は大きいと考えます。これまでも医師の過重労働や小児科・産婦人科の不足についても結局は医師のボランティアに近い精神性・犠牲の上に医療が成り立っている現状を考えるに、国の政策として是正を図るべきではないかと私は強く考えるのです。八郎潟の例にあるように、国の政策が長期的に正しいことが保障されているわけではなく、不都合が起きるたびに迅速に対応する必要がありますが、現実には事態が深刻化してからようやく重い腰を上げることが往々にしてあります。公害が良い例です。改善のためには現状がどうなっているのかを適正に評価せねばならず、その上で社会医学が統計という道具を用いて世間と厚生労働省他関係部署にアピールする必要があるのではないのでしょうか。

医療の世界には長らく閉鎖的でおおよそ「経済」や「効率」の概念が希薄で、大きな問題が発生した際の対処の方法が大局的な観点からの解決策を提示できないお粗末なものではない現状を変える可能性があるのは、疾病の発生を防ぐのも重要ですが、社会医学の使命だと私は考えます。

最後に、他の大学で社会医学に興味を持つ学生との交流の場を設け、私に医師不足の問題について深く考えさせる機会を与えてくれた、このセミナーを主催された本橋先生、金子先生、講師の先生方、その他このセミナーの開催に尽力を尽くしていただいた先生方に厚くお礼を申し上げます。ありがとうございました。

Quy Pham Nguyen 東京医科歯科大学医学部 4年

第12回社会医学サマーセミナーに参加させていただき、どうもありがとうございました。三日間は短かったが、合宿みたいな感じでとても楽しかったし、また色々な面で大変勉強になりました。

出発する前に情報収集しなかったので少し不安でしたが、秋田駅に到着してバスに乗ろうとした時高知大の鈴木君と星野君に出会い、親切に話してくれて安心しました。

秋田県青少年交流センターに着いた途端に講義が始まるので、自分が疲れて集中できないのではないかとと思ったらそうではありませんでした。高野先生による開講式のご挨拶の中

で強調されたこのセミナーの長い歴史、社会医学の特徴、そして参加して下さった先生方々の熱意を知って、やる気が出ました。

去年と比べて今年度のセミナーは講義が多いとのことでしたが、様々な問題が取り上げられて面白かったです。大学で既に勉強したことでもセミナーのお陰で異なる角度から見る事が出来てとてもよかったです。先生方は講義中でも、飲み会中でも疑問に対して丁寧に答えていただいただけでなく、私の母国であるベトナムに対しても興味を示し、色々アドバイスを下さいました。心から感謝いたします。セミナーのお陰で自分がやりたいこと、出来ることをより明確に分かってきました。

今回のセミナーで一番楽しかったのは他の大学の医学生と会話すること、友達になることでした。それぞれ異なるバックグラウンド、異なるセミナーに参加する理由を持つ人間が集まって医学・教育・社会・人間・（そして恋愛まで!!）といった色々なテーマについて話し合うのは何よりも面白いことです。それがたった三日間で出来たのは一緒に勉強したり、食事をとったり、宴会をやったりする共同作業の時間が多かった他、参加者皆は社交性に富み、周りのことにも興味を強く持つからであると思われます。会話の中で各々の個性が現われているが、医学生、特に社会医学好きな医学生の共通点を感じました。セミナーの思い出を自分の宝物とし、将来この共通点を発揮できる仕事をしていく間に、今回知り合った友達にまたどこかで会えるといいなと願っています。

最後に、この貴重な機会を与えて頂いた高野先生と中村先生、熱心に講義をしていただいた先生方、そして親切に案内して下さいました本橋先生、金子先生、感謝を申し上げます。秋田の社会医学サマーセミナーは本当に忘れられない楽しい体験でした！

星野 悠介 高知大学医学部 2年

今回、社会医学セミナーに参加するきっかけとなったのは、私が所属する環境医学教室の中村教授が講義の際に、このセミナーを紹介されたことだ。社会医学に興味をもったのは、私が以前、他大学の経済学部を卒業していたので、社会ともっとも関わる医学分野が社会医学だと思ったからだ。しかし、教室に所属してはいるものの、それらしい勉強や活動はほとんどしていないのが現状で、セミナーに参加しても講義や他の学生についていけないのかとても心配していた。

8月20日セミナー当日、秋田空港に降り立ちその暑さに少々ためらいを感じながらも、同じ高知大学の鈴木さんとともに会場に向かった。会場に向かうバスは乗っている客全員がセミナー参加者だったということが、あとで分かった。

一日目の講義は5つあり、それらについて細かいことは書かないが、厚生労働行政についての講義が興味深かった。そもそも、医系技官という職業があるということも知らなかったもので、世の中にこのような職業があるということを知っただけでも収穫だったと思う。講義の後、夕食をとり、お酒を飲みながら、他大学の学生や、先生がたと交流した。高知

にいとなかなか他の学校の人と交流する機会がないのでこのような機会は非常に貴重だと思う。

8月21日セミナー2日目、朝3つ講義があった。午後は大潟村へ行った。秋田の温泉は安くて泉質もよく、最高だった。その後、会場に戻り、中路先生の講義を非常に興味深く聞き、夕食後、交流会。ここでは、金子先生や丹藤先生や、中路先生から主に話を聞かせてもらった。また、日本酒が美味しくて少々飲みすぎてしまった。その後も部屋で他の学生たちと飲み、語り楽しい夜を過ごした。

8月22日セミナー3日目、村田先生の講義を聞き、鯉にメチル水銀含有量が多いということを知り少し驚きながら、犬ぞりの話などを興味深く聞き、グループ発表へ。グループ発表では、各班ともよく準備されていてとても優秀な学生ばかりだと感じた。

全体を通して

今回の社会医学セミナーに参加して、いろんな分野の話が一度に聞けて、かつ全国から集まった他大学の志の高い学生と触れ合えるという、またとない貴重な機会でした。このようなセミナーを準備され開催していただいた先生方に心から感謝しております。次のセミナーでまた皆様と会えれば、そしてもしかしたら、将来仕事に関わることがあれば、そのときはなにとぞよろしくお願い致します。

松田 真樹子 福島県立医科大学 5年

社会医学セミナーでは、全国の先生方の講義を聴けたことはもちろん、グループ討議を通じて自分たちからも社会医学にアプローチできたことがとても良かった。

飽食の時代と言われ、昔ながらの日本の食生活が注目される中、辻先生の「戦前の食事に戻せば寿命が延びる、というのは間違い」という言葉が心に残った。戦後の食生活が寿命を延ばした、という意味でもあると思うが、メディアの影響力の大きさも感じると同時に、与えられた情報をただ受け入れるのではなく、深く考察して自分のものにしていくことも大切だと思った。

福島先生の講義では、ナイアシン、トウモロコシ、パーキンソン病の関係を丁寧に説明して下さり、最新の研究について十分理解できた。

グループ討議では、産業廃棄物の責任をめぐる民と官の問題を3日間考えた。セミナー当日に課題が渡されたが、グループで話し合うことによって様々な意見を聞くことができ、また、自分の考えを論理的に説明することの難しさを実感した。

1つの課題を集中的に3日間考え、自由時間を活用してグループで協力し発表までまとめるのは、大変ではあったが有意義な時間を過ごせたと思う。グループのメンバーとは特に進行を深めることもできたように思う。課題のジャンルはセミナーが始まる以前に、複数の選択肢を示して頂けるともっと良かった。

厚生労働省の方の講義は、将来の選択肢の一つとして伺うことができ、参考になった。

実際どんな仕事をしているのか、どんなことができるのかを知り、医系技官という職業をより具体的なイメージで捉えることができたと思う。

このような社会医学セミナーがあることで、社会医学の様々な研究に触れることができると同時に、先生方とも直接お話しすることができ、良い機会であった。秋田の観光も含まれていて、秋田を楽しむこともできた。今回初めて参加したが、もっと低学年の時期から参加できたら良かったと思った。また、今回は抽選だったのでより多くの人が参加できるように参加人数を増やしても良いと思った。

今回セミナーを開催するにあたってご協力して下さった先生方、スタッフの方々に感謝しております。本当にありがとうございました。

松原 啓祐 東京医科歯科大学医学部 1年

1年生ながら、初めて社会医学サマーセミナーに参加させていただきました。1年生ということで専門知識を学んでいないので、学生とセミナーでの会話ができるかどうか、レクチャーの内容についていけるかどうか、参加するにあたり不安はかなりありました。今振り返ってみると、多少分からない言葉はありましたが、専門知識の不足はそんなに気にする必要はなかったと思っています。実際、講師の方々は、分かりやすく、面白く、専門知識にとらわれない講義をしてくださりました。また社会医学はそれほど身近な話題が多いともいえるのかもしれませんが。社会医学というのは行政から研究、臨床にいたるまで多岐にわたるものだ、とつかめただけで私にとっては大きな収穫だったと思います。レクチャーでは、普段聞くことのできない他大学の教授の研究の話が聞けたことは貴重な機会であったと思います。ですがそれよりもさらに貴重だと感じているのが、他大学の教授はじめ、厚生労働省の方、さらに他大学の学生までが混じって、自由に会話する機会があったことです。普通に生活しているとなかなか話す機会のない方々と、社会医学に関する議論から、日常生活のこと、恋愛論に至るまで気兼ねなくお話できたことはとても刺激になりました。広い人間関係が少しでも築けたことも大変嬉しく思います。私はもともと、臨床以外には全く興味はなかったのですが、大学での授業をきっかけに、社会医学について少し興味を持ち始め、このセミナーに参加して、社会医学という道も真剣に考えるようになりました。今後どう変化するかは分かりませんが、憧れという域を抜けてないのかもしれませんが・・・。上級生になり、本気で専門を意識し始めてから参加するのももちろんいいと思います。ですが、私のように1、2年のうちに、普段の授業ではあまり接することのない社会医学に接するのも大きな刺激になると思います。秋田での3日間はとても刺激的でした。まだまだ憧れだとか、イメージだとかそういった域を抜けていない私ですが、今後も自分の進路をみつめ、機会あればまた来年もぜひ参加したいと考えています。

山田 香里 聖マリアンナ医科大学医学部 3年

私は、正直なことを言うと社会医学にそれほど興味は無かったのですが、「面白そう、秋田は行ったことがない。」という軽い気持ちで今回の社会医学セミナー参加を決めました。しかし、セミナーの日が近づくとつれて他の参加者は、社会医学に凄く熱意を持っている人ばかりで自分は浮いてしまうのではないかと心配に思いながら参加しました。

緊張しながら始まったセミナーですが、講義はどれも教授の先生方がお話してくださり、これほど多くの大学の、しかも教授の先生方の講義を聴けたのは滅多にない貴重な機会でした。また、先生方の講義内容もとても幅広い分野に渡っていたことが驚きでした。私の大学では、3年次から“医学と社会”という科目として社会医学の分野の授業が始まります。この授業を受けて4ヶ月の私のイメージとしては、統計が沢山出てきて難しそうとか、産業医学、予防医学などといった非常に抽象的なものでした。しかし、実際に今回の講義で先生方の専門とされていることや現在取り組まれていることを聴き、ある意味とても自由で様々な可能性の広がっている分野であると感じました。実際にお話を伺った先生方も「時にはあまり気の進まない仕事もあったけど、自分のやりたいことが出来る。」とおっしゃっていました。どの講義も大変勉強になりましたが、特に今回興味深かった講義は、車谷先生のアスベストについてのものです。今社会で騒がれているのと、大学でアスベストの工事をしていたことからとても身近に感じられました。このような大きな問題は社会医学の先生方が研究されているからこそ対策や解決に近づくことができるのだと改めてわかりました。もう1つ、弘前大の中路先生のお話は、“先生は本当に社会医学が大好きなんだ”と思うほど熱意が伝わってきて、聴き入ってしまいました。それから、意外だったのが、どの先生も本当に話し易い気さくな方ばかりだったことです。医学のことは勿論、それ以外のまさか教授の先生とこんなことは話せないだろうと思うようなことまでお話して頂け本当に楽しかったです。また、グループ課題や夜の交流会等を通して他大学の違う学年の方と知り合い、話をすることが出来るとも良い刺激になりました。どの参加者もそれぞれの考えがあって参加していて、中では「臨床もいいけど、社会医学は一度に大勢を助けられるから将来はそっちに進もうと思っている。」と話してくれた先輩参加者の話を聴いて、今まで全くこの進路は考えに無かったのですが、新たな選択肢に加わりました。厚生労働省の方の医系技官の話からも、医者といっても道は沢山あるのだとわかりました。

今回軽い気持ちで参加しましたが、とても多くの発見をして、自分の視野が広がったことは確かだと思います。予想以上に刺激的で、こんなに楽しいとは思っていませんでした！リピーターの気持ちがあった気がします。

3日間このような素晴らしい体験をさせて頂き、先生方本当に有難うございました。

山本 匠 岡山大学医学部 5年

今回、社会医学セミナーに参加することになったいきさつから、話したいと思います。

今回の社会医学セミナーを知るようになったきっかけは、夏休みの衛生学の実習の中の一つにこのセミナーが紹介されており、このセミナーの存在を知ることとなりました。もちろん、ただ知っただけでは、このセミナーに参加することはなかったでしょう。

僕は、5年生の間に将来、自分はどのような職業につきたいかについて考えるつもりで、臨床については、学校の実習にてよく見えますが、社会医学という分野は、授業であるのみで、ほとんど未知の領域でした。だからこそ、きっとこのセミナーに参加すれば、社会医学という分野がどのようなことをする世界なのかが見えるのではと思い、このセミナーに興味をもちました。そして、衛生学の実習とは関係ないが、岡山より秋田まで行こうと思立ちました。

このセミナーに参加して一番充実していると思った時間は、先生方と夜よく話しができたことでした。先生方が、社会医学の分野にはいるようになった経緯やどのようなことに興味を持っていらっしゃるかなど先生に直接質問したり、社会医学にどのような分野があるのか、いろんな専門の先生方より直接その分野の話を聞けたり、僕が疑問におもっていることを聞ける機会は、とても貴重なものでした。また、参加者の人たちも、いろいろな考えをもって、このセミナーに参加しており、刺激を受けました。

このセミナーを通じて、僕は、社会医学は、とても生き生きとした世界だなと感じました。そして、人と人とのつながりが、とても大切になる学問だなと思いました。あと、取り扱う問題の幅広さに驚き、と同時に可能性も感じました。

まだまだ、語りつくせないほどの刺激をこのセミナーから受けました。このようなセミナーを開催していただき、誠にありがとうございました。来年のセミナーも予定が合えば、是非、参加させていただきたいです。

吉田 藍 福井大学医学部 4年

秋田駅を午後一時近くに出発し、名古屋付近での悪天候のせいもあり、福井に到着したのは夜の十一時過ぎでした。初めての秋田県は大変遠かったのですが、電車に乗っている間中、この三日間の楽しい思い出が私の心を満たしてくれました。

正直なところ、最初は本橋先生のこと、社会医学の守備範囲すらも、何も知らずにただポスターの美しさに惹かれて参加しました。しかし、自分で言うのには抵抗がありますが、この3日間で私の視野は広がり、成長の糧にすることができたと大変満足しています。

医療従事というのは、病気の人を相手にしているという意味では特殊な職業だと思えますが、私は、「医師として、健康な人にどのようにアプローチができるか」と漠然と考えていました。今回の内容には予防医学も含まれていましたが、やはり、健康診断を単に早期発見の機会と捉えるのではなく、労働環境、食生活などを含む生活状況を考え直す機会という認識を広め、その中で個人に応じた柔軟性のあるアドバイスをしていくことが必要であり、私にも将来は出来るであろうと思います。そのためには人材の確保はもちろんのこ

と、単なる脅しではなく、人の心を動かすような説明・宣伝の仕方についても吟味が必要です。

社会医学以外でも多くを感じる事が出来ました。本橋先生からは、人の上に立ち、さらに人を集めることの出来る人間的魅力を、圓藤先生からは、予防医学の難しさとその可能性、また少子化を進めている社会風潮の異常、中村先生からは働く女性の魅力とお酒の飲み方を、交流会でお話をさせていただく中で感じました。そして、最も強く感じたこと、そして嬉しかったことは、私たち学生は愛情を持って育てられている、ということ、また、共通の関心を持った仲間が各地から集まり、彼らからも新鮮な刺激を受けました。

セミナーに参加する少し前まで、昨年度の資料から事前予習が必要だと思い込んでいたため、私は臓器移植の実情と課題を検討したいと思っていました。特に糖尿病性腎症による人工透析患者の増加背景がありますから、腎移植について取り組もうと考えていました。今回のグループ学習の経験を踏まえて、また、友人たちと様々な問題についての議論を楽しんでみたいと思うようになりました。

最後になりましたが、このような機会を与えていただき、多くの先生方にお世話になりましたことを心から感謝します。ありがとうございました。

淀谷 光子 岡山大学医学部 5年

参加のきっかけは、衛生学・公衆衛生学合同の学外実習でした。学外実習が必須なら、面白そうなものを選ぼうという単純な動機で、社会医学セミナーへの参加を決めました。社会医学そのものには多少の関心もありましたし、全国から集まってくる医学生と交流できるのも、魅力の一つでした。さらに会場は秋田県という、この機を逃せばまず滅多に訪れることはないであろう場所であったのも、動機につながったかもしれません。

セミナーそのものには関係ありませんが、恐らく最後の夏休みだろうと、頑張って岡山から18切符と夜行のムーンライト越後を使い、お金の無い学生らしい交通手段で秋田まで参りました。周りの人からは呆れられ、体力的にもきつい行程でしたが、これもいい経験になりました。

講義について

大学の授業で教わった以上に専門的で、私のイメージを超えた内容の講義でした。コーチングサポートと母子保健の話とアスベストと岩木健康増進プロジェクトの話が特に興味深かったです。それぞれの分野で、それぞれの方法で、考えなければならぬ問題は山ほどある⇒若い人たちが活躍できる場もありそう、と感じました。

テクニカルビジット(大瀧村)について

小学校で習った八郎瀧干拓事業。実際に訪れる機会をいただき、ありがとうございました。

た。干拓事業を解説した資料館は少し物足りなかったのですが、人間の考えた将来への見通しが、随分甘いものだったのだと感じました。八郎潟を追われた龍の八郎太郎は、田沢湖に住む龍の辰子姫に温かく迎え入れられて冬だけでなく一年中一緒に暮らしていることでしょう。

グループ討議について

事前予習なしで頭をつき合わせて考えるのは面白かったです。資料も少ないわけですから、自分の経験や知識と想像力での勝負でした。一人ひとり別の視点を持っていて、でも同世代の医学生というかなり均質なバックグラウンドがありますから、煮詰まってしまい、なかなか議論が進まないこともしばしばでした。そんな時、自殺率の差は健康格差ととらえるんだ、という本橋先生の言葉に、グループの全員が目から鱗でした。事象の捉え方が私はまだまだ表面的なのだと実感しました。交通網・情報網が発達し、文化も均一化⇒どこに住んでも以前より地域差はなくなっている、という漠然としたイメージがありましたが、自殺率の都道府県別表を見ながら、むしろ地域差は拡大してきていると感じました。

最後のグループ別発表会では、他のグループの発表を楽しく聞かせていただきました。特に感心したのは、産廃処理施設を扱った環境問題でした。本当にそのシステムで問題点の解決になるのかどうかは分かりませんが、学生案のシステムはよく考えられていて面白いものでした。

最後に

このセミナーに参加している学生は、当然ながら将来社会医学の分野での仕事を希望する学生が多く、臨床家希望の学生とはまた別の視点で医学を考えている話を聞いたのが大変良かったです。私そのものは臨床家の希望なのですが、しっかり自分の頭で考えて、広い視野で、という心がけを持ち続けたいです。来年は初期臨床研修先を決めるマッチング試験に追われているだろうと予想されるのですが、是非またこのセミナーに参加し、自分の中に臨床とは違う風を吹き込んでおきたい、そう思います。

このセミナーを主催された、本橋先生、金子先生、講師の先生方、その他このセミナーの開催に尽力を尽くしていただいた先生方、大変貴重な勉強の場を与えていただき、本当にありがとうございました。

おわりに

今年の東北の夏は8月半ばを過ぎても、真夏のような日差しの強い、東北らしくない夏であった。8月20日から22日にかけて、全国から医学を志す学生諸君が秋田に参集し、社会医学への熱い情熱を見せてくれたうれしい夏でもあった。ポスターに秋田市の竿灯祭りの様子を大写しにしたのも、学生さんを秋田へ牽きつける効果があったと聞いて、主催者として胸を撫で下ろした。

さて、3日間のセミナーは、衛生学公衆衛生学の第一人者の先生方の講義、大潟村へのテクニカルビジット、グループワークとその発表と、盛りだくさんな内容とさせていただいた。最近チュートリアル教育が主流で、先生の講義をじっくりと聴くというスタイルが薄れているような気がする。みっちり講義を聞いていただいたのは、私としてはよかったと思っている。(学生さんより、私たち教員の方が、多方面の第一人者の先生方の密度の濃い講義を聞いたことに感激しているせいかもしれない) また、夜の部では、学年や教師と学生という枠を超えて、人生のことや社会医学のことを語り合えたのが、何よりもすばらしかった。女子学生の恋愛論の相談にのるといふ若々しい体験ができたのも、私にはたいへん新鮮だった。

さて、秋田の夏は終わり、学生さん達は自分の大学へと戻っていった。ここに参集した学生さんの多くが、社会医学への目を開き、将来の私たちの後継者になる可能性を、私は実感している。

今回の社会医学セミナーの開催にあたり、遠路はるばる秋田にお越しいただいた講師の先生方、ご多忙中にもかかわらず厚生労働省ならびに秋田県からご参加いただいた行政官の先生方には、あらためて厚く御礼申し上げます。最後に、高野教授をはじめ、衛生学公衆衛生学教育協議会事務局の先生方には、開催にあたり多大なご支援をいただきましたこと、心より感謝申し上げます。(第12回世話人 本橋 豊)



テクニカルビジットでのひとこま (秋田県南秋田郡大潟村 サンルーラル大潟にて)

第 12 回社会医学サマーセミナー報告書

発行日 平成 18 年 10 月 20 日

編 集 第 12 回社会医学サマーセミナー事務局
秋田大学医学部社会環境医学講座健康増進医学分野
〒010-8543 秋田市本道 1 - 1 - 1
TEL : 018-884-6086 FAX : 018-836-2609

発行人 高野 健人 (衛生学公衆衛生学教育協議会代表世話人)
東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科
環境社会医歯学系 国際健康開発学講座 健康推進医学分野
〒113-8519 東京都文京区湯島 1-5-45
TEL : 03-5684-4505 FAX : 03-3818-7176

第13回 社会医学サマーセミナー

主題: 接点としての社会医学を楽しむ

報告書

2007年10月23日

代表世話人: 高野健人

第13回世話人: 車谷典男・圓藤吟史

第 13 回社会医学サマーセミナー報告

第 13 回世話人 車谷典男・圓藤吟史

1. 日程

- ①2007年8月24日(金)13時半に開始し8月26日(日)11時45分に終了した。
- ②奈良県社会教育センター(奈良県葛城市)に現地集合し、2日目の午後に明日香村への study tour を兼ねてバスで共済組合会館・春日野荘(奈良市)へ移動し、翌日の正午前に現地解散。

2. 参加学生の内訳

- ①セミナーの目的と従来の参加人数(31頁)を勘案して募集定員40人としたが、予定通りの参加人数を得ることができた。
- ②大阪での日本衛生学会の折に開催された衛生公衆衛生教育協議会(2007年3月25日)で、ポスター(33頁)の配布とプログラムの概要説明をし、学生への案内と参加呼びかけを協議会会員に依頼した。
- ③サマーセミナー用のHPを作成し周知に努めるとともに、衛生公衆衛生教育協議会のメーリングリストを通じて学生への呼びかけを改めて依頼し、さらに過去のサマーセミナーの参加者で作っている学生のメーリングリストを通じての参加呼びかけもした。
- ④参加学生(32頁)の内訳は次の通り。学部学生37人(1年生4人・2年生3人・3年生5人・4年生7人・5年生9人・6年生9人)・修士課程1人・博士課程2人、男性22人・女性18人、初回参加者は37人であった。
- ⑤セミナーの資料集(37頁から113頁)を、参加学生と参加スタッフに郵送で事前配布した。

3. セミナーの教育目標

- GIO：社会医学の視点・考え方を身につける。
- SBO：①社会医学の役割を説明することができる。
②社会医学の課題を論じることができる。

4. プログラム：大きく4部構成とした(34頁)。

- ①特別講義：自身の研究を素材とした各分野の専門家による特別講演。実際の研究過程、研究成果の紹介を通じて、社会医学の役割、重要性、面白さを参加学生に知ってもらうことを目的としたものである。
- ②小講演「私の社会医学」：なぜ社会医学の道を選んだかの個人的な体験の紹介を通じて、参加学生への動機付けを意図したものである。
- ③グループワーク：参加学生を6人程の小グループ(ほぼ学年順)にわけ、「社会医学の役割と課題」は何かについての自主的な討論を、セミナーの期間中に継続して行うことを求めた。
- ④グループ発表：上記③の成果(パワーポイントで6枚)を、最終日に各グループから質疑応答を含めて各15分発表の受けた(4頁から9頁)。

5. セミナーの評価

セミナーの開始時および初日と 2 日目と最終日の各終了時に、無記名でセミナーへの評価を求めた(10 頁と 11 頁)。6 つの質問各々についてその時点の自分の位置をマーク(VAS)してもらう形式のものと、自由記入形式のものと用意した。

- ①3 頁に 6 つの質問の平均値の推移を示す。「社会医学への興味」は開始前から平均 7.0 と高い。当然の結果ではあるが、この質問も含めて全ての質問で、セミナー終了時に評価値の有意な上昇が認められた。とりわけ「社会医学の課題」さらには「社会医学の役割」については日を追うごとに有意な上昇をみせており、今回のプログラムがセミナーの目的を達成させる内容であったことを示唆する評価と考える。
- ②自由記入欄の意見を整理したものが 12 頁から 27 頁である。匿名化してある。セミナー参加時に「応募動機」を提出(109 頁から 113 頁)してもらっているが、読み比べると興味深い。「セミナーの改善点」(19 頁と 20 頁)についても率直な意見をもらっている。正味 2 日間の日程であり、多少詰め込みすぎたかも知れないと思っていた心配が多少現実となっている。次回からの課題である。しかし、全体的には肯定的な評価(21 頁から 27 頁)と考える。
なお、参加スタッフの感想も掲載した(28 頁から 30 頁)。

6. 総括

3 日間の短期間の評価であるが、本セミナーが社会医学の理解を深める機会として、また社会医学を選択する動機付けの機会として、その機能を果たしていることがうかがえた。セミナー形式であるために参加人数は限られているが、今後継続していく価値は十分あると考える。